

令和5年度 学力向上指導改善プラン

三田市立母子小学校長 川嶋 弘則

学校教育目標		4月		2～3月			
推進主体		学力向上に向けての重点的な目標		年度末評価			
学力に関する前年度の状況・経年の課題等		成果となる目標 (指標となる数値等)		具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)			
国語		○書く・話す活動の充実 ○言語力の向上 ○読書活動の充実 ○根拠を明確にして発表する力をつける。	・書く・話すことを通じて、表現力を向上させる。 ・漢字や語句の意味などテストにおいて80%以上の正答を目指す。 ・家庭での読書を含め、年間100冊以上の読書数を目標とする。 ・「根拠となる部分」を明確にして発表することができる。	・授業内で自分の考えを書く場面を積極的に取り入れ、自分の考えをまとめる機会を作る。また、文集やクラス作りなどを通じて相手意識を持つことができてくるようになる。 ・あててやりとり返りを教科や特別活動で行い、全校生の前で意見を感想を述べた機会を設ける。 ・毎日の授業や宿題等で漢字を一緒に書き、3週間の漢字アタック(漢字テストで採点を確認し)定着を図る。辞書やタブレット端末を有効的に使い読書力を伸ばす。 ・ピリオドやフックワークの活動を継続し、母子家庭読書の目を設定することにより、読書活動や読書内容の充実を目指す。 ・相違を中心に根拠となる部分を見つけて発表ができるようにする。また、学年に応じて図書やインターネットから情報を集める。必要な情報を取り出しまとめる活動を取り入れる。	～3月 ・朝の会や授業中に書く場面を意識して取り入れることにより、書くことへの抵抗が少なくなっている。 ・「あててやりとり返り」などの場面でも意識して行うことができ、子どもたちが時間を意識して授業に臨めるようになる。 ・全学年の児童が週1回の漢字アタックに向けて、授業や家庭で漢字を書く練習を積み重ね、その効果が表れている。今年度は漢字アタックの正答率は90%が目標であったが、1年度生は漢字を忘れてしまう傾向に定期的な小テストをし、各教科の書きこきをさらに取り入れたことで、漢字を使う場面を意識した取組を行い、漢字まめテストの正答率は85%以上に高めている。 ・書く力を活用した取組は、全学年意識して進めることができている。各学年の実態に合わせた作文力を工夫しつづけていく。 ・言葉の力(語彙力)の弱い児童もいるので、読書活動や体験活動とつながら言葉の力をつけていきたい。また、相手を意識した伝え方、コミュニケーションの力をつける取組を今後続けていきたい。 ・自分の考えの根拠となる文や言葉を選択することができるように、さらに深まる表現力をつけていきたい。	評 価	
算数		○算数でのひとり学習やおたずねの取組等により、考える力が伸びてきている。 ○朝の計算アタックでは週に1回のドリルパークを加え継続することで、個人差はあるが四則計算などの計算力が伸びてきた。 ●根拠となる部分を選ぶことや、記述を要するような説明問題が弱い傾向にある。	・週3回以上の計算アタックの中にドリルパークを加え、計算力の定着と基礎学力の向上を図る。朝休みや放課後の時間を利用して個別指導を行い、算数のまめテストの正答率を80%以上に高める。 ・毎日算数のひとり学習に取り組み、授業の構えを作ると共に、工夫したノート作りを促す。 ・「おたずね」を通して学びを深めていく。また、大切なことを板書に残し、学びの質を高める。	・計算アタックでは記述をグラフ化するところにより、自分で伸びを実感し、喜びやよぼうとする意欲につながる。今後も「見える化」を意識しつづけて、個に応じた問題や苦手な部分を探り、個別指導を目指して続けていく。 ・低学年のうちから、四則計算を基にした計算問題を仕込むことにより、力をつけていく。引き続き家庭と連携しながら継続していく。 ・分からないところをはっきりさせるのも(ひとり学習)の大切な活動であり、分からないことがあれば積極的に児童も問うてみる。引き続きあかあか(自立)のところまで、自分で行っているように、朝の時間等で支援していきたい。 ・多くの児童が式だけでなく、図や表、グラフ、線分図など、式とつなげて考えたり発表したりすることができるようになる。また、タブレット端末を活用して発表できるようになる。発表の場等によって深めていきたい。	・計算アタックでは、自分で伸びを実感し、苦手な課題についても楽しみに取り組むことができた。 ・低学年のうちから、四則計算を基にした計算問題を仕込むことにより、力をつけている。引き続き家庭と連携しながら家庭学習を充実させたり、休み時間や放課後の個別支援を行ったりするなどで、算数のまめテストの正答率を85%以上に高めている。 ・言葉の力(語彙力)の弱い児童もいるので、読書活動や体験活動とつながら言葉の力をつけていきたい。また、相手を意識した伝え方、コミュニケーションの力をつける取組を今後続けていきたい。 ・自分の考えの根拠となる文や言葉を選択することができるように、さらに深まる表現力をつけていきたい。	A	
ICT機器を効果的に活用した取組状況		○計算アタックにて取り組んでいるドリルパークの学習を通して、算数の基礎・基本的な学習が充実してきている。 ○iPadを各教科・各領域の学習に活用している。	・ドリルパーク、デジタル教科書を活用し、漢字の定着、計算力を向上させる。 ・オクリンク、ムーノートを活用し、算数の授業における「おたずね」の活性化等、表現力の向上させる。 ・iPadを効果的に活用できるよう、情報活用力を育む。 ・iPadの活用 ・プログラミング教材の活用	・朝の学習にて、ドリルパークを活用する。 ・授業の中に「オクリンク」や「ムーノート」を活用する。 ・iPadを効果的に活用していく。	・週に1回(金曜日)ドリルパークを取り入れることで、興味関心を持って意欲的に取り組むことができた。今後も個に応じた問題や苦手な部分を探り、個別指導を目指した取組を続けていく。 ・オクリンクについては、操作法に習熟しているのでもより活用方法を今後考えていきたい。 ・タブレット端末については、調べごとやKeynoteなどのまめ発表や交流、発表に活用している。 ・今後Keynoteの共同編集機能を使ったまめの学習を取り入れていきたい。	B	
定期テスト、単元テストなどによる状況(各教科)		●簡単な計算間違いをしがちで、説明を要するような問題が弱い傾向にある。(経年) ●児童一人ひとりの「つまづき」の確認、きめ細やかな指導をする必要がある。	○個別指導の充実 ○授業の進め方の改善 ・漢字や語彙力、四則計算等の基礎基本の定着を図る。	・放課後や休み時間等を利用して、弱い部分の補充や漢字や計算の基礎基本の定着を行う。 ・漢字アタックや計算アタック(既習事項の確認)を行っている。	・休み時間や放課後の時間などを利用して、学力補充をおこなうことにより個別最適な学びにつながっている。今後も続けていく必要がある。 ・漢字アタックや計算アタックの基礎基本の定着を引き続きはかしていく。	A	
授業等からうかがえる状況(各教科)		○どの教科でもあててやりとりを、行事等でも活かされるなど定着している。全員の児童が算数を楽しいと感じている。 ●自分の意見は持っているが、体験や人と合う経験が少ないため語彙力が少ない。また、相手の意見に付け加えて自分の意見を発言することが少ない。	○算数のガイド学習を中心に自分たちですめることに自信を持ってきている。また他教科や特別活動でもガイド学習を活かした授業を行っている。 ○分かる楽しさや充実感を得るような授業づくり	・教師の出場により、あててやりとりを積極的に取り入れることができている。 ・算数の授業において、教材解釈や教材研究、授業実践によって全職員で共通理解を深めていくことが大切である。共同学習者においても、どの部分をもっとも発表させるかを考えながら進めていきたい。また、子どもが興味・関心を持つことができるように研修を積んでいきたい。	・教師の出場(でば)については定着しつつある。今後も研究を積み重ねながらガイド学習を他教科につなげていく。積極的に取り組んでいきたい。 ・算数の授業において、教材解釈や教材研究、授業実践によって全職員で共通理解を深めていくことが大切である。共同学習者においても、どの部分をもっとも発表させるかを考えながら進めていきたい。また、子どもが興味・関心を持つことができるように研修を積んでいきたい。	B	
慣学・力生向上に活かす学習の状況		○学習意欲・生活習慣については良好と判断できる。 ・【100%だった項目】 ・教師への信頼感 ・いかなる理由でもいじめはしない ・朝食を食べている	○家庭における学習習慣及び生活習慣の定着・向上	・家庭学習が充実し習慣化、定着するよう子どもたちを指導し、通信等「家庭」に発信していく。 ・教師リズムを整え計画的な学習習慣を定着させる。また、情報モラルの授業を今後も続け、タブレットの正しい使い方をさらに深めていく。	・学校学習や学習態度、家庭学習の取り組み等を活用し懇話会や家庭訪問等で保護者に発信していく。また、保護者との連携をとっていく。 ・保護者指導や保護者、保護者の授業、学習態度等で生活習慣や健康に関する情報発信も発信している。情報モラルの授業を今後も継続していく。	・「児童アンケートや保護者アンケートから家庭学習の習慣が定着しつつある一方で、家庭の協力が必要なケースもある。引き続き家庭と連携して取り組んでいきたい。 ・読書については、だんだん長い物語に挑戦する子どもが増えきた。ブックトークで紹介したり、音聲の読み聞かせなどを通じて、読書の楽しさや面白さを伝えていきたい。 ・保護者だけでなく指示板を使った保護者指導により、子どもたちや保護者の意識は高まりつつある。継続して取り組んでいく。	A
学校評価などのアンケート調査による児童・生徒の状況		○1日平均70分家庭学習を行っている。ひとり学習をほぼ全員が行っている。 ●「お家の人に学校や友だちのことを話していない」児童の割合が2割いる。	○家庭における学習習慣及び生活習慣の定着・向上 ○家庭でのコミュニケーションの充実	・「1月に本を読む冊数が5冊以上」の児童の割合を90%に高める。 ・「お家の人に学校や友だちのことを話している」児童の割合を100%に高める。	・「母子家庭読書の日」を20日だけでなく「週」とし、読書活動を推進していく。また、「ピリオド」や「フックワーク」で読書力を伸ばしていく。 ・学校だよりや学級通信、懇話会、学校地域連携協議会等を活用し、啓蒙を行っている。	・学校評価アンケートの結果、「お家の人に学校や友だちのことを話している」児童が100%と満足している。引き続き、学校だよりや学級通信、懇話会を通じて家庭と子どもを近くすることができるようにする。	A
研修内容の状況		●今までの算数科の研究を引き継ぎながら、「書く力」を伸ばす」教師の出場や「書く(描く)」ことに取り組む必要がある。	○校内研究の充実とガイド学習の工夫と発展 ○子どもが活躍する算数科学習 ○共同学習者の入り方と連携	・今年度の全国へき地大会を見据え、「子どもの深い学びをめざした学びの育成」に向けた研修活動を推進する。 ・算数を中心とした教科でも「おたずね」を通して「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点で授業改善を目指す。 ・「数教を中心とした教科でも「おたずね」を通して「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の観点で授業改善を目指す。 ・1日に1回以上はICT機器を活用した授業や朝の会等を行う。	・「全員が年相応3回以上は発表公開を行い、ガイド学習の発展と教師の出場や「指導(児童)の表現力」「教材研究」などの課題克服に向けた取り組みを行う。 ・「深まる」の観点から、現場で実践する。そのための準備や準備、部分的なガイド学習を取り入れるなど、学力の向上に取り組む。 ・タブレット端末を取り入れた授業の実践 ・多くの教師で教師の出場に関する出席を考えた。ガイド学習を行うなど、主体的に考える力を持てていく。 ・タブレット端末を取り入れた授業の工夫・改善を行い、マイラーシステムも活用し学力の向上を図る。	・今年度は、全国へき地教育研究大会の会場となり、授業公開や研究発表を行うことができた。また、参加者の先生方から多くの質問や感想をいただき、これまでの研究の取組を交流することができた。その中で深まる授業の実践や、今後の課題を共有し、今後の取り組みについて話し合うことができた。 ・算数のガイド学習の取組は、他教科や特別活動にも活かされている。子どもたちが主体的に活動する様々な場面で見られるようになった。 ・タブレット端末を使った発表や説明が定着している。今後はマイラーシステムのオクリンクやムーノートを使い、学力の向上に努めていく。	A
家庭・地域等との状況		○学校・学級便りやHP等により、有効な情報発信を継続している。 ●今までも取り組んでは来ているが、より一層、地域人材を活用し、連携を図りながら一歩進めていく必要がある。	○学校だよりや学年通信、またHPを活用した子どもたちの様子の発信。 ○地域人材の発掘、整備	・週1回の学級通信、学校便り、HPで子どもたちの様子を掲載する。 ・教員及び学校改善担当教員が窓口となり、地域の人材やボランティアを積極的に活用し、地域の人材開発に取り組む。	・連携を通して学校や学級、学習の様子、行事の案内、準備物、1週間の予定など積極的に発信し、家庭での活動にもより努める。 ・「深まる」の観点から、現場で実践する。そのための準備や準備、部分的なガイド学習を取り入れるなど、学力の向上に取り組む。 ・「深まる」の観点から、現場で実践する。そのための準備や準備、部分的なガイド学習を取り入れるなど、学力の向上に取り組む。	・学校や学級が積極的に情報発信を行うことにより、保護者アンケートでは肯定的な評価となっている。引き続き情報発信を行い、家庭の話題にもより努めたい。 ・各学年それぞれ地域の方を訪ねたり、講師としてお招きしたりしてふるさと学習に取り組むことのできる。新築教室をはじめ、ササアズキ、そば、花豆、夏野菜、冬野菜の栽培、収穫、また、そば打ちや地場の特色を活かした取組を行うこととしている。	A
携種間連携		○相互の研究会等への参加や、幼小中連絡会、出前授業の取組を通じて、児童生徒の理解を図り、連携が密になりつつある。 ●幼小中連絡会にて決定した校歌の目指す子ども像「みんな育てよう」を具体化・活用していく方法を探っていく必要がある。	○幼稚園、小学校、中学校の11年間の連続性を共有した学校間連携の推進	・幼小交流や小中交流、小中交流、小規模校交流を積極的に推進する。各学年、年1～2回小規模校を活かした交流を行う。 ・学際型(1回年3回)と、幼小中連絡会を開催し、前年度の成果と課題を踏まえた取組を推進するとともに、目指す子ども像「みんな育てよう」を具体化していく。	・目標を持って行動し、他校の児童と積極的に話すことができる活動(授業交流、交流会)などを実施し、連携を推進する。 ・研究会、研究発表等に1人1回以上積極的に参加し、授業改善を図るとともに、幼小中連絡会、小中連絡会を推進する。 ・キャリアパスポートを活用し、小中・高での連携を図る。	・各学年また全校で1～2回小規模校を活かした交流を行い、児童から積極的に発信することができた。 ・学期に1回以上、小中連絡会を開催し、連携の方針や課題について共有することができた。 ・今後も相互の研究会等への参加、出前授業の取組を継続していく。 ・上野台中校区の目指す子ども像「みんな育てよう」を全体懇話会において再度配布し、説明を行うことで家庭に周知徹底を図っていく。	B